

義母とシマウマと私

岡本 卓也

人 物

井野貴美江（七十五歳）発明家

井野良子（四十歳）貴美江の息子の嫁

井野隆（四十二歳）貴美江の息子・良子の夫

○井野家 外観（夕）

築四十年の庭付きの一軒家。

○同居間（夕）

犬や猫、数羽のインコ、熱帯魚にイグ

アナ等々、たくさんの動物でごった返

している室内。その中心に置かれた机

を囲い、井野貴美江、井野良子、井野

隆の三人が座っている。怒りを抑えた

表情の良子、悲しそうに俯いている貴

美江、気まずそうな表情の井野。貴美

江、テーブルにおかれた数枚の写真に

手をやり愛おしそうな声で、

貴美江「シマウマさん、シマウマさん」

哀れみを誘うような表情で良子を見る

貴美江。その貴美江を睨み返す良子。

良子「絶対反対ですから。シマウマ飼うなん

て。もう十分でしょ、今でさえこの家もう

動物園みたいになっちゃってるんですよ」

がつくり肩を落とす貴美江。

良子「だいたい馬ならまだしも、なんでシマ
ウマなんですか」

よくぞ聞いてくれたといった表情で良
子を見る貴美江。

貴美江「見たでしょ、あなたも」

良子「見ましたよ、先週夢見ヶ崎動物園で」

貴美江「なんとも思わなかったの」

良子「なんとも」

貴美江「ハートマンヤマシマウマのことよ」

良子「種名までは覚えてませんけど」

貴美江「あのシマウマ私を見て何て言ったと

思う」

良子「さあ」

貴美江「飼って、って言ったの」

良子「あの、お母さん」

貴美江「あなたにも言ってたわよ」

いらいらいした様子の良子。

良子「お母さんが、その、動物と心を通わ

すことができるというの、重々承知して

おりますが」

貴美江「そうでしょ」

良子「暗記した文章を読み上げるように

良子「しかし、馬やラクダとは違ってシマウ

マは人間になつくことはほとんどなく、シ

マウマの家畜化に成功した例は全く知られ

ておりません」

井野、良子の方を見て、

井野「調べたんだな、ウイキペディアで」

自信ありげに頷く良子。残念そうな井

野。貴美江、良子をじっと見て、

貴美江「シマウマはそうは言ってます」

井野、貴美江の反撃を期待する表情で

井野「お母さん、何て言っただんですか、シマ

ウマは」

貴美江「世間の常識が、必ずしも真実である

とは限らない」

井野、輝くような目をして、

井野「そう言っただんですか、確かにシマウマ

は！」

良子「わかりました。でははつきり言わせて

いただきます」

一息つき改まった表情で良子。

良子「シマウマはワシントン条約にて保護されてお
り、個人での飼育は許可されていま
せん」

さすがに諦めたとばかりが作り肩を
落とす井野。対して表情そのままに落
ち着いた様子の貴美江。貴美江、立ち
上がって二人に背を向け、

貴美江「近く私は動物園を開きます。よろし
くどうぞ」

啞然と貴美江を眺める良子と井野。良
子、立ち上がり、

良子「いい加減にして下さい！だいたいそん
なそんなお金どこにあるんです。去年の犬

猫から始まって今年はいグアナ、インコ、
陸亀、孔雀。この時点で中の下の夫の給料

とお母さんの年金だけじゃもううちは破産
ぎりぎりなんです。どうしても言うな

ら、自分でお金稼いでやってください！」

貴美江、振り返り良子を睨みそのまま
部屋を出ていく。しばらくするとカバ
ー部分がひっくり返ったビニール傘と
それに繋がれた犬一匹を連れて貴美江
が戻ってくる。

良子「まさか、そのペットの雨の日用散
歩グッズ、お母さんの特許商品だって仰る
つもりじゃないですよね、」

頷く貴美江。貴美江に近づき散歩グッ
ズを繁々と見る井野。

井野「これ、売れるかも」

目を輝かせる井野。もう疲れきつたと
いう様子の良子。

良子「分かりました。もうこれ以上私からは
何も申し上げません。そんなにシマウマ好
きならシマウマと再婚なさったらどうです
か」

その言葉に凍り付く井野。悲しそうに
部屋を出て行く貴美江。井野、良子を見
て、

井野「いくらなんでもそれは言い過ぎだぞ。
去年親父がなくなつてからおふくろが寂し
い思いしているの、お前だつて分かつてる
だろ」

良子「分かつてるわよ私だつて。でもだから
つてなんでも許せば良いつてもんじゃない
でしょ。さっきの特許だつて、結局お母さ
んが先に発明したつて証拠なんて何にもな
いじゃない。あなたからもつとはつきり
駄目なものは駄目つて言うべきよ」

そのまま黙りこくる二人。

○同 寝室（夜）

薄暗い室内。寝付けない貴美江が布団
の中でシマウマを数えている。

貴美江「シマウマが一匹、シマウマが二匹、
シマウマが三匹、」

数え続ける貴美江。

○同 台所（朝）

慌ただしく朝ご飯の用意をしている良

子。パジャマ姿でテーブルの椅子に腰

かけ新聞を読んでいる井野。良子、料

理をテーブルに並べながら、

良子「どうしてシマウマなんでしょ」

井野「飼って、って言われたからだろ」

良子「本当に信じてるの、そんな理由」

新聞から顔を上げ井野、

井野「お前反対なんだろ、シマウマ飼うの。

だったらそんなこと考える必要ないだろ」

料理をテーブルにおく手を止めて良子

良子「あるわよ」

不思議な顔で井野、

井野「おかしなやつだな」

神妙な面持ちで鍋を洗い始める良子。

○同 居間（朝）

特許願と書かれた書類にペンを走らせ

ている貴美江。書き終わるとペンを置

き立ち上がる。棚の上に置かれたコー

ドレス電話とメモを手に取り、メモに

書かれた電話番号を押す。電話を耳元

に運ぶ貴美江。電話のコール音。

貴美江「あつ、いつもお世話になります。井

野でございます。佐藤弁理士にお繋ぎ頂け

ますか」

テーブルの特許出願書を手に取り、取

りつぎを待つ貴美江。

貴美江「あつ、佐藤先生。はい、井野でござ

います。ええ、そうです、先日の特許の出

願の件ですが、明日直接伺って相談したい

と思っております。あつ、はい、では明

日お昼に。どうぞよろしくお願いします」

電話を切る貴美江、部屋の端に置かれ

た仏壇に目をやる。その様子を少し開

いたドアの向こうから見ている良子。

× × ×

仏壇の前でお経を上げている貴美江。

貴美江「爾時世尊。従三昧。安詳而起、」

お経を唱え終えると鈴を叩き、手を合

わせつぶやく貴美江。

貴美江「おじいさんそして先祖の皆々様、我が家の守り神として、シマウマが井野家にやっつて参りますように、何卒、何とぞお力添えをお願い申し上げます」

深々と頭を下げる貴美江。その様子を考え深げにじつと見ている良子。

○神社境内

拝殿の前で深々と頭を下げ、手を合わせている貴美江。その様子を少し離れたところから良子と井野が見守っている。貴美江は繰り返し鳥居と拝殿を行き来し手を合わせている。次第に雨が降ってくる。見かねた様子で井野が貴美江に近づこうとする。その井野を制止する良子。

井野「おい、もういいだろ。おふくろもこれだけやれば気が済んだだろうし」

良子、貴美江の方を見つめたまま、

良子「続けさせてあげましょうよ」

雨脚はさらに強くなつていく。それで

も止めない貴美江。良子、そんな貴美

江を見つめぽつりと一言。

良子「シマウマじゃなきやだめなのよ」

良子の言葉を聞き直す井野、

井野「なんだって」

良子、貴美江を見つめたまま、

良子「家族三人で住めるかしら」

井野「え？」

良子「家族三人で引越すのよ」

井野「どこに？」

良子「アフリカとか、そういうところよ」

不思議そうな表情で良子を見る井野。

良子「もちろんそのお金は、お母さんの発明

の特許でなんとかしてもらいますけど」

だんだん雨が上がり、雲の隙間から太

陽がのぞく。変わらず参拝を続けてい

る貴美江。その貴美江をじつと見つめ

続ける良子。